

6月22日（月）サムエル記第二16章15～19節

「また、私はだれに仕えるべきでしょうか。私の友の子に仕えるべきではありませんか。私はあなた様の父上に仕えたように、あなた様にもお仕えいたします。」（19節）

アブサロムと彼につき従っていたすべての民、イスラエルの人々は、エルサレムに入りました。ある意味彼らは無血入城したわけですが、それは、ダビデが「彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの都を討つといけないから。」（15：14）と言って、すぐにエルサレムを離れた結果でした。もしそうでなければ、ダビデとアブサロムは父子同士で争うこととなり、エルサレムの町も火で焼かれたり、建物が破壊されたりと、さまざまな被害が出たはずですが、しかし、アブサロムには、そのようなダビデの思いは何も届かなかったかもしれません。そして「アヒトフェルも一緒であった。」とありますが、ダビデの助言者であったアヒトフェルがダビデを裏切り、アブサロムに寝返ったのですが、（15：12）アヒトフェルの立ち位置が、これから重要になっていくことを暗示しているようです。

ダビデの友アルキ人フシャイ（15：37）がアブサロムのところに来た時に、フシャイは「王様万歳。王様万歳」と言います。ヘブロンにおいて自分で即位式をしたアブサロムを王として受け入れるとの意思表示です。フシャイがダビデの友であることは周知の事実だったのかもしれませんが、ですから、フシャイがダビデとともに行かなかったのは、アブサロムを驚かせたと同時に、彼を疑心暗鬼にさせたのかもしれません。ですから、フシャイに向かって「これが、あなたの友への忠誠の表れなのか。なぜあなたは、あなたの友と一緒に行かなかったのか」と尋ねます。それに対してフシャイは、まず18節で「主と、この民、イスラエルのすべての人々が選んだ方、すなわちアブサロムに自分はつき、一緒にとどまります。」すなわちダビデとは行かないと言います。そして19節で「あなた様にもお仕えいたします。」と言います。これはもちろん15章34～36節でダビデが命じたことを忠実に果たそうとしたことの現れです。あらためて聖書で言われている「友」の意味について深く考えさせられました。聖書で言う友の一つの特徴は、相手に対して常に真実であり、忠実であるということです。それは、フシャイがダビデに対して忠実であったことから分かります。イエス様は私たちに友と呼んでくださり、十字架におかかりになることで、ご自身の友としての真実と愛を私たちに現してくださいました。私たちもイエス様の友であるなら、イエス様に対してどこまでも忠実に、また真実にイエス様にお仕えすべきです。

6月23日（火）サムエル記第二16章20～23節

「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はすべて、ダビデにもアブサロムにもそのように思われた。」（23節）

アブサロムは、アヒトフェルを頼りにしていたのでしょうか。エルサレムに入った後、どうすべきかを彼に相談します。すると、アヒトフェルは、ダビデの側女のところに入るように言います。その理由として「あなたは父上に憎まれるようなことをされたと聞くでしょう。あなた

に、くみする者はみな、勇気を出すでしょう。」と語ります。慣習的に先王の側女を取り上げることはあったようですが、あえてダビデに憎まれるようなことをすることで、ダビデと完全に決別して新しい王位に就いたことを知らしめる意味があり、このことはアブサロムの側につく者たちを勇気づけ、離脱者が出るのを防ぎ、内部の結束を一層固めるのに役に立ったことと思われます。それと同時に、以前にもありましたように、このことはナタンの預言の成就であり、（１２章１１節）であり、神様があえてそのようにされたとも言えるでしょう。そしてアブサロムは、そのように行いました。

２３節の「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。」というのは、アヒトフェルの進言に従って行動したなら、ことごとく成功したという意味です。しかし、アヒトフェルの進言は、あくまで人の知恵から出た言葉であって、神のことばではありません。ですからダビデが「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものとしてください。」と祈りましたが、神が彼の助言を愚かなものとしたなら、それは決して成功しないのです。私たちも、人に助言を求めることがあります。もちろん、それが悪いということではありませんし、人が神のことばを伺って得ることばのように、物事がうまく進んでいくかもしれません。しかし、何かあったとしても誰も責任は取ってくれませんし、もちろん主に責任を問うのは筋違いでしょう。むしろ、人の言葉ではなく、主のことばによる導きを祈り求めてそれを信じて進む信仰者とさせていただきましょう。そうすれば、もし何かあったとしても、主がすべてを最善にしてくださり、主に導かれている確信による平安が常に私たちを支配することでしょう。

6月24日（水）サムエル記第二１７章１～５節

「アブサロムは言った。「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」（５節）

１節でアヒトフェルは、「私に兵士一万二千人を選ばせてください。私は今夜すぐに、ダビデの後を追ひ始めます。」と申し出ます。その理由として２節でダビデが疲れて気力を失っている間に奇襲をかけるべきで、そうするとダビデの家来たちはみな逃げ出してしまうので、自分はダビデ王だけを打ち殺すと言います。さらに３節では「私は兵全員をあなたのもとに連れ戻します。」と言います。つまりダビデさえ打ち殺せば、他の兵たちは必ず自分たちに投降してくるということです。そして「民はみな、穏やかになるでしょう」というのは、ダビデがいなくなれば、もはやアブサロムに反逆する者がいなくなるということです。そして、このことばは、アブサロムと全長老の気に入るところとなりました。ですから、このままですと、アヒトフェルの提案通りにアブサロムの兵たちがダビデを追撃に出かけて行くこととなります。ところが、５節で「アルキ人フシャイも呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう。」とアブサロムは言い、ここに確かな神の介入がありました。つまり神がアブサロムの心に働きかけて、ダビデの友フシャイを呼び出すことにしたのです。

神は聖徒たちの人生に介入され、導かれるお方です。神は決して私たちに無関心ではありません。そして、物事が進んで行く背後には、みこころによる神の働きがあり、私たちの歩みを支

え、守ってくださるのです。私たちの意識しないところでも、そのように働いてくださる主を信じて、主が守ってくださるように日々祈りたいと思わされます。そして、ここまで自分の歩みが守られたこと、そして信仰の歩みが支えられたことは、すべて主の守りのゆえであることをおぼえて、主に心から感謝しつつ、御名をたたえましょう。

6月25日(木) サムエル記第二17章6～14節

「これは、主がアブサロムにわざわざいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めておられたからである。」(14節)

6節でフシャイが来ると、アブサロムはアヒトフェルの作戦を話して、意見を求めます。それについてフシャイは、7節で「このたびアヒトフェルの進言した助言はよくありません。」と言い、8節からその理由を述べますが、ダビデがどのような人物なのかを思い出させようとしています。まずダビデと彼の部下は戦士だと言います。ですから、そう簡単に奇襲が成功するとか、ダビデを見捨てて他の兵たちが逃げ出すようなことは考えられないということなのでしょう。また彼らは「野で子を奪われた雌熊のように気が荒くなっています」と言います。彼らは、アブサロムによって都を追われ、そこから逃げなければならなくなったことについて怒りと悲しみに満ちていて、相手にできる状態ではないということを言おうとしています。また、ダビデは戦いに慣れているので、兵士たちと一緒に夜を過ごすことはなく、洞穴かどこかに隠れていて簡単には見つけられないと言います。このことは散々サウルの手から逃れて、サウルが捕まえられなかったことでも実証済みです。またその後ですが、もしダビデがどこにいるのか分からず見つけられないうちに、アブサロムの兵のうちの最初に倒れる者が出始めれば、「アブサロムに従う兵たちのうちに、打たれた者が出た」との知らせが一気に広がるはずだと言うのです。つまり、そのことによって心をくじかれたり、逆に逃げ出す兵士も出るのではないかということです。そのことを例えて「獅子のような心を持つ力ある者でも、気がくじけます。」と言いました。そして8節で「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです。」と言いましたが、10節でも「全イスラエルは、あなたの父上が勇士であり、彼とともにいる者が力ある者であるのをよく知っています。」と言います。

そして11節からフシャイは自分の作戦を述べます。それは、一万二千人という数ではなく、「全イスラエルをダンからベエルシェバに至るまで、数多くあなたのもとに集めて、そしてアヒトフェルではなく、アブサロム自身が戦いに出るよう」と言います。そして次に作戦面では、露が地面に降りるように密かに彼を襲うというもので、いわば奇襲作戦です。13節では、どこかの町に逃げこめば、それだけ大勢の兵で攻めるのだから、町に縄をかけ引きずっていくようにして攻め取ることができると提案したのです。14節では、フシャイの助言は、アヒトフェルの助言よりもよいとアブサロムとイスラエルの人々みな言いました。しかし、その理由として、「これは、主がアブサロムにわざわざいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めおられたからである。」と記されています。まず、主なる神様はフシャイを用いられたということです。もう一つが、フシャイの助言は、アヒトフェルの助言より

もよいと言わせるような知恵を主は授けたということです。実際に、14節では「アヒトフェルのすぐれた助言」と言っているわけですから、主はそれを上回るような知恵を与えたということです。三つめは、ダビデの「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものとしてください」との祈りに答えてくださったということです。ですから、主が祈りに答えて、常に助けてくださることを信じて、主に祈りの手を上げ続けましょう。

6月26日(金) サムエル記第二17章15～23節

「アヒトフェルは、自分の助言が実行されないのを見ると、ろばに鞍を置いて自分の町の家に帰り、家を整理して首をくくって死んだ。彼は彼の父の墓に葬られた。」(23節)

自分の助言は、アヒトフェルの助言よりも良いと思わせ、アヒトフェルの助言が実行されないようにすることに成功したフシャイは、あらかじめダビデに命じられたとおりに、そのことを祭司ツアドクとエブヤタルに知らせ、ダビデに伝えさせます。アブサロムの追撃を遅らせることに成功したフシャイは、ダビデに、荒野の渡し場で夜を過ごすことなく、すぐに渡し場の向こうへ渡るようにと言います。

17節で、ヨナタンとアヒマアツはエン・ロゲルにとどまり、そこで女奴隷を通してダビデに伝えることになっていました。18節である若者が彼らの動きを見て怪しいと思ったのでしょうか、アブサロムに告げました。そのことに気がついた二人は、ダビデに味方するある人の家に入り、そこにあった井戸に隠れました。その人の妻が、井戸に覆いをかけ、その上に麦をまき散らしたので、だれにも知られず、しかもアヒアマツとヨナタンはどこにいるのかと尋ねるアブサロムの家来たちに、川の方へ行きましたと教えたので、彼らは二人を発見することができませんでした。そして難を逃れた二人は、急いで川を渡るように言い、ダビデと彼とともにいたすべての者たちは川を渡ったので、アブサロムから逃げ切ることができました。主は、みこころによりこのように助ける者たちを備えられ、ダビデの命を救い、父子同士で戦いを交えることを避けることができました。

その一方でアヒトフェルは自害することとなりました。ダビデとともにいたすべての者たちがヨルダン川を渡ったことでその前にダビデたちを攻撃するというアヒトフェルの助言が果たされることはなくなりました。これによりダビデは支配権を回復することで、必ず自分はダビデ軍に捕らえられ、ダビデの助言者であったにもかかわらず、王に対する謀反のかどで死刑にされることは確実なので、自分にはもはや将来がないことをアヒトフェルは悟ったのでしょう。静かに事態を受けとめ、なすべきことを実行しました。有能な人でありましたが、アヒトフェルは悲劇的な最後を迎えることとなりました。私たちは、自分の知恵に頼り、また自分の判断で行動して失敗してしまうことはないでしょうか。私たちに与えられている知的な能力も主によって与えられたことをおぼえて、主のために用いささせていただきます。そして、常に主のみこころに従って行動し、決して自分の判断で勝手に行動することのないようにしたいものです。

6月27日(土) サムエル記第二17章24～29節

「ダビデがマハナインに来たとき、アンモン人でラバ出身のナハシュの息子ショビと、ロ・デバル出身のアンミエルの息子マキルと、ロゲリム出身のギルアデ人バルジライは、寝台、鉢、土器、小麦、大麦、小麦粉、炒り麦、そら豆、レンズ豆、炒り豆、蜂蜜、凝乳、羊、チーズを、ダビデと彼とともにいた民の食糧として持って来た。彼らが「民は荒野で飢えて疲れ、渴いています」と言ったからである。」(27～29節)

ダビデが、ヨルダン川を渡ってマハナインに着いたとき、アブサロムもダビデの後を追ってヨルダン川を渡りました。アブサロムは、戦いのために隊を整えようとして、アマサをヨアブの代わりに軍団長に任命し、ギルアデの地に陣を敷きました。ダビデがマハナインに来たとき、ショビ、マキル、バルジライの三名が、寝台、土器、食糧を持って来ました。このことがダビデと彼とともにいた者たちをどれほど励ましたらうかと思わされます。

まず彼らは、「民は荒野で飢えて疲れ、渴いている」と聞き、そのダビデたちの必要に答えようとしたのです。私たちも、教会や宣教師、他教会、さまざまな宣教団体からの必要の訴えを聞きます。その中で私たちが自分のできる限りをもって、その必要に答えたいと思わされます。しかし、決して私たちはプレッシャーを感じたり、担いきれないと思うような重荷を背負い込む必要はありません。そのような必要は他の兄弟姉妹とともに担い合っていくべきものだからです。次に、彼らが持って来た物がどれほどダビデと彼とともにいた人たちを励ましたことだらうと思います。必要に答えるかたちでのささげ物は、その人を本当に励ますことができます。そのようなかたちでの私たちの励ましを必要としている方はおられないでしょうか。祈ってみましょう。三つ目ですが、この三人はまさにダビデの必要を満たすために神様が備えられた人たちです。私たちも、他の人の必要を満たすために主によって用いられる者とされたいと思わされます。しかし、主は誰でも用いることができるわけではありません。例えば貪欲な人を主はどのようにして用いて、他の人の必要を満たすことができるでしょうか。主に常に心を開き、主にささげきった者を主は用いることができるのです。

そして彼らは決してダビデから何か報いを得ようという下心はなかったはずです。私たちも周りの人の必要に答える時には決して報いを求めない無私の心が必要です。そして、世にあっては報いられることがなかったとしても、主なる神様が私たちのしたことに恵みをもって報いてくださいます。そのことをも深くおぼえましょう。

6月28日(日) サムエル記第二18章1～5節

「王は、ヨアブ、アビシャイ、イタイに命じて言った。「私に免じて、若者アブサロムをゆるやかに扱ってくれ。」兵はみな、王が隊長たち全員にアブサロムのことについて命じているのを聞いていた。」(5節)

ダビデは自分の軍を立て直すために、千人隊の長と百人隊の長を任命し、兵の三分の一をヨアブのもとに、別の三分の一をアビシャイの指揮のもとに、そして残りの三分の一をガテ人イ

タイの指揮のもとに配置しました。それからダビデは、自分も出陣すると言います。5節などを見ますとアブサロムのことが気になっていたのかもしれませんが、しかし、3節を見ますと兵たちは強く反対します。それは、アブサロムと彼が率いる兵が狙っているのは、ダビデ軍の兵士たちではなく、ダビデ自身だからです。それと同時に、もしダビデが戦場で討ち死にするようなことがあれば、それこそ軍の求心力が失われ、兵たちがバラバラになるのは目に見えています。ですから、兵たちは出陣しないで、町にいて私たちを助けてくださるほうがよいと言ったのです。ダビデは、兵たちの提案を受け入れ、門のそばに立ち、出陣する兵たちを見送り、彼らを励ましました。そして、それぞれの隊の隊長であるヨアブ、アビシャイ、イタイに「私に免じて、若者アブサロムをゆるやかに扱ってくれ。」と言います。皆さんは、このダビデの声かけをどう思われるのでしょうか。父親に反逆した息子アブサロムにダビデは甘すぎると思うのでしょうか。これからアブサロムの軍の戦いに赴こうとしている兵たちにかかる言葉としてふさわしくないと思われるのでしょうか。私は、ここに父親ダビデの息子アブサロムに対する深い愛を見る思いがしました。反逆しようが何をしようが、息子に対する父親の愛は決して変わることがありません。それとともに、私たちは神に対して反逆に反逆を重ね、罪の世を神を信じないで歩んでいました。その私たちに対する神の愛は決して失せることはありませんでした。父なる神の私たちに対する愛は、決して見捨てようとしない、あきらめの悪さに表れています。みこころをわきまえないで歩んでいても、罪に罪を重ねるようなことをしても、父なる神は私たちを子として扱い、悔い改めて再び主に従う歩みをするようになることを願っているのです。十字架を通して現わされた父なる神の愛は決して変わることがないのです。